

アパシーの類型化の検証

海光拓磨

令和4年度に修士課程を修了した海光拓磨です。皆さんはアパシーという症候をご存知でしょうか。アパシーとは脳卒中後に起きる高次脳機能障害のことで、一般的に意欲低下をきたします。私が働く回復期リハビリテーション病院ではこのアパシーによる症候が原因で、せっかくリハビリをして良くなる患者でも、意欲低下によってリハビリのやる気を損ない、リハビリの成果がなかなか出ないことが多いです。さらに、アパシーは意欲低下という漠然とした症状であることから、アパシーへの対応策もありませんでした。しかし、近年、アパシーは「情動感情障害型」「認知行動処理障害型」「自己賦活障害型」と3種類に分類できるのではないかと報告がされております。このことに私は着目し、脳の血流を分析し、その結果を分類することで「本当にアパシーを分類できるのか」を生理学的データから検証することを自信の研究テーマにしました。脳の血流はNIRS（近赤外分光法）という機器を用いて分析することができます。3種類のアパシーは、それぞれ神経回路が想定されています。この神経回路の一部をNIRSで捉えてアパシーの類型化を図りました。

アパシーの3類型はそれぞれ特徴的な症状を示します。このように、アパシーを単に意欲低下と捉えるのではなく、アパシーを詳細に分類することで、その特徴に合わせた介入を実践できる糸口となります。

研究が進み、3種類のアパシーに対する介入効果が確立されれば、私たちが勤める回復期リハビリテーション病院でも、今よりも高い成果を上げられることができると考えています。このように研究結果を臨床に結び付けることができる研究に修士課程の2年間取り組んだことを誇りに思っています。そして、これからもリハビリテーションに少しでも貢献できるように自分にできることを探求していきたいと考えています。

